宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

古典指導の着眼点：今に生きるものとして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 東京法令出版 公開日: 2007-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 利博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/969

古典指導の着眼点
——今に生きるものとして

山田利博

問題の所在

「古典の授業活性化への道」というテーマで論文を求められた。しかし私は、いわゆる教科専門担当教員で、教科教育が専門ではないので、画期的な授業方法が提示できるわけではない。そこで、このような点にもっと留意すれば、私の専門である古文の授業はもっと活性化するのではないかという着眼点を一つ提示させていただくことにした。

私も昔は高校教員であったので、その時の経験に鑑みると、古文が嫌われる理由の第一はおそらく文法のうるささであろうが、二番目辺りに、「そんな昔のことをして何の役に立つのか」という思いがくるのではなかろうか。実際そのような質問を生徒からぶつけられたこともあったし、とりあえず古典は尊重するけれども、それを過去の権威として捉えている人も、私に言わせれば同様である。

何故ならこれは大きな誤りだからで、事あるごとに強調しているところだが、古典は今でも立派に生きており、それに気づかせることが、「古文」の授業を活性化させる早道であると思われる。と言うのは人間、何の役に立つのか分からないことを学ばされるのは、やっぱり苦痛だからである。

そこで本稿ではそうした一助として、極めて多数ある事例から、紙幅の都合で二つほど紹介することにした。「相撲」と「曜日」である。

相撲

相撲というと現代ではやや古風なスポーツかもしれないが、それも立派に生きている。近頃は日本の力士よりモンゴルの方が強いようで、横綱を頂点に相当数がひしめいているが、その強さの秘密の一端は、モンゴルにも似たようなスポーツがあるからに他ならない。このことから分かるように、類似したスポーツは実は世界のかなりの範囲にあるのだが、それでも日本に特徴的なものも多く、例えばそれは「土俵」と「東西」に分かれることである。「東西」から見てみよう。

百科事典等の簡単な書物にもあるように、日本の相撲の期限は、『古事記』国譲りの条で天照大神の命を受けた健御雷神（たけみかづちのかみ）と、大国主命の息・健御名方神（たけみなかたのかみ）が、出雲の国を賭けて力比べをした次のような記事、

> 如此白（かくまを）す間に、其の健御名方神、千引の石を手末に擎（ささ）げて来て、言ひしく、「誰ぞ我が国に来て、忍ぶ忍ぶ如此白物言ふ。然らば力競べを為むと欲（おも）ふ。」といひき。故、其の御手を取らしむれば、即ち立氷に取り成し、亦、剣の刃に取り成しき。故爾（しか）くして懼（を）ぢて退き居りき。爾くして其の健御名方神の手を取らむと欲ひて、乞ひ帰（よ）せて取

れば、若葦を取るが如く搤り批きて投げ離てば、即ち逃げ去りき。（原文は言うまでもなく変体漢文。読みは、小学館・新編日本古典文学全集に従う）

または、『日本書紀』垂仁天皇七年七月七日の条にある、以下の記述に求めるのが普通である。

七年の秋七月の己巳の朔にして乙亥に、左右奏して言さく、「当麻邑に勇悍の士有り。当摩蹶速と曰ふ。其の為人、力強くして能く角を毀き鉤を申ぶ。恒に衆中に語りて曰はく、『四方に求めむに、豈我が力に比ぶ者有らむや。何とかも強力者に遇ひて、死生を期はず、頓に争力すること得てむ』といふ」とまをす。天皇聞しめして、群卿に詔して曰はく、「朕聞かく、当摩蹶速は天下の力士なりと。若し此に比ぶ人有らむや」とのたまふ。一臣進みて言さく、「臣、聞るに、出雲国に勇士有り。野見宿禰と曰ふ。試に是の人を召して蹶速に当せむと欲ふ」とまをす。即日に、倭直が祖長尾市を遣し、野見宿禰を喚す。是に、野見宿禰、出雲より至りしかば、当摩蹶速と野見宿禰とに捔力せしむ。二人相対ひ立ち、各足を挙げ相蹴う。則ち当摩蹶速が脇骨を蹶ゑ折り、亦其の腰を蹈み折りて殺す。故、当摩蹶速は地を奪りて、悉に野見宿禰に賜ふ。是を以ちて、其の邑に腰折田有る縁なり。野見宿禰は乃ち留り仕へまつる。（原漢文。これも新編古典文学全集に従う。以下同じ）

しかし、前者はあくまで神話、後者も実在が疑わしいから、史実として初めて記録された認められるのは、同じく『日本書紀』皇極天皇元年（六四二）七月二十二日の、百済の王族・翹岐をもてなすため、健児に命じて相撲を取らせたという次の記事である。

乙亥に、百済の使人大佐平智積等に朝に饗へたまふ。乃ち健児に命せて、翹岐が前に相撲とらしむ。

このように、この頃はまだ不定期に行われたらしいが、八世紀になると、毎年、大体七月七日に行われるようになり、天長三（八二六）年以降になると同じく七月ではあるが、年代によって動くようになる。しかしやはり七月中であるという点は重要で、七月七日はもちろん七夕であるが、日本の七夕行事は輸入した中国とはだいぶ異なり、最近では冷泉家の七夕棚で有名なように、盆棚の如く様々な海の幸・山の幸を棚に飾って星に捧げた。だから「たなばた」なのであり、考えてみれば「七夕」をそう読むのはどう考えても無理なのであるが、つまるところ日本の七夕は、もともと庶民の間で行われていた作物等が豊富であるよう祈願する行事で、後に中国伝来のものと習合して、貴族にも広がったようである。だとすると、その時行われる相撲もまた豊作を祈願するものだったらしいと分かれば、何故相撲が、「東西」に分かれなければならないかはもはや明白だろう。

つまりあれは、東国と西国の代表であり、勝った方が豊作ということを表しているのだ。ただし、平安時代の相撲の節会では「左右」に分かれており、「東西」が定着するのは、専門家も確定できないようだが、江戸時代頃らしい。けれど、平安においても、現天皇の大嘗会の時にも出てきた東国の代表・悠紀と西国の代表・主基の国司が見物しているので、基本は変わらないと思われる。そして土俵もまたそれと関連するのだが、それについては先ず「房」の話から始めねばならない。

もとは屋外競技であった相撲が屋内で行われるようになった現代では、土俵上の屋根はほとんど飾りとなってしまったが、良く見ると四隅に四つの房が付いている。尤も「物言い」が付けば見なくても分かり、その下に座っている審判員はそれぞれ、「赤房下」とか

「白房下」とか呼ばれているはずで、それを良く聞けば四つの房の色は、青・赤・白・黒であることが知れる。ただしこの房は、記録によれば昭和二十七年まで柱であったが、未曾有のブームにより、柱の後方に座った観客に勝負の微妙な決まり手が見えないという理由で日本相撲協会が変えたとされている。しかし色だけは変わりがないそうで、古文慣れしてくると、この色の組み合わせは陰陽五行説であることが瞬時にして分かる。

陰陽五行説とは、古代中国に生まれた、この世の万物は木・火・土・金・水の五つの元素から成るという哲理であることは言うまでもないが、五元素それぞれを象徴するものとして、色では青・赤・黄（中国は黄土であるため）・白・黒、方角では東・南・中央・西・北、季節では春・夏・土用（土用は今では丑の日のイメージしかなかろうが、本来は五行に合わせるため各季節から十八日ずつ切り出して作られた第五の季節である）・秋・冬が当てられている。すなわち、青・赤・白・黒は、そのうちの四色ということになり、残った一つが、「中央」にある「土」俵というわけである。

これは別にこじつけではなく、江戸時代の相撲の本によれば、その頃には土俵に横幣が立てられていたとあるから、陰陽五行を意識していたことは間違いない。ついでに言えば、相撲につきものの四股は、やはり陰陽道等で使われる、大地の精霊を呼び覚ます所作と言われる「反閇（へんばい）」だから、総合するとこれも、地の精霊を呼び覚まし、四季の健やかな循環を願うという、農作物の豊かな実りの祈願と結びついたものなのである。

尤も土俵も平安時代にはまだ無く、先ほどの『古事記』や『日本書紀』に見られたように、勝負はどちらかが続行不可能な状態に陥るか、「参った」をするまで続けられていたけれども、やはり江戸時代に土俵が成立し、今見るような決着の付き方になった。したがって、専門的に見れば前述した思想は、比較的近年に誕生したことになろうが、一般的な現代人から見れば、江戸時代とて古い時代に違いなかろう。それゆえ現代に生きる古典の例としてこれを掲げてみたが、この節最初にも述べたように、これはやや特殊な世界に属するかもしれないから、もう少し身近な例を一つ加えよう。予告した「曜日」の話である。

曜　日

私も教員の端くれであるから、今日の日付は忘れても、曜日だけは間違えたことがないが、この例から考えても、恐らく現代人に最も親しまれていると思われる曜日の呼称も、やはり古文に源泉を持っている。

そんなことを言うと、「あれは西洋からの輸入ではないのですか」という反論が予想される。確かに古文には「旬（十日間）」という概念があるけれども「週」は無いから、その批判もあながち的はずれでもないが、良く考えればそうでないことは分かるはずである。と言うのは、Sunday が日曜、Monday が月曜までは良いとしても、Tuesday は何故「火曜」なんだということになるからである。

少し神話に詳しい向きなら、それは北欧神話の軍神チュール（テイル）に由来し、軍神だから「火」なんだと答えることができるかもしれない。これはまだ納得できるものなので認めても良いが、次の Wednesday になると、北欧神話の主神オーディンに由来することは明らかであり、かつオーディンは別に水神ではないのだから、やはりこの考えは成り

立たない。それは同じく北欧神話の雷神トールに由来するThursday、愛と美と豊穣の女神フレイアに由来するFraidayについても同様で、ローマ神話の農耕神サトゥルヌスに由来するSaturdayに至ってやっと少し一致する。

尤も、星に詳しい向きは、木星の英語名Jupiterは、ローマ神話の主神で雷神のユピテルに由来し、金星は愛と美の女神ヴィーナスだからあっているのではないかと思うかも知れない。しかし、何故それを「木星」とか「金星」と訳すのかというのがそもそも問題であるし、それを不問に付すとしても、先ほど書いたように、オーディンは北欧神話の主神だからユピテルに該当し、「水曜」と「木曜」の辺りはこの考えでも上手くいかないはずである。そこでいよいよ日本古典の登場となるわけだが、結論から言ってしまえばこれは、「宿曜（すくよう）」に用いられていた「七曜」なのである。

源氏物語で光源氏が臣籍降下される時にも出てくる「宿曜」とは、インドに由来する占星術で、古来ほとんどのものがそうであるように、中国経由で日本に伝わった。そのやり方は、西洋占星術でも用いる黄道（太陽が通る筋道。もちろん正確には太陽は動かず、地球の公転により、そのように見えるのだが、言うまでもなく当時は天動説しかないので、このように呼称する）十二宮と、天の赤道に位置する二十八の星座（これを二十八宿と呼び、七つずつ、青龍・朱雀・白虎・玄武（陰陽五行説でそれぞれ東南西北を守護する四聖獣。別名四神）に配する）、加えて太陽（日）と月、及び当時知られていた五つの惑星（火星・水星・木星・金星・土星。因みに惑星とは文字通り「惑う星」、すなわち恒星とは違う動きをするので、比較的早くから気づかれていた。そして名前から知れるように、これもまた陰陽五行説により、ここまでが「七曜」なのである）、さらには「計都（けいと）」と「羅睺（らごう）」という架空の二惑星を加えた「九曜（くよう）」等も用い、それらの組み合わせで占うというものであった。

そして、細かい経緯は不明とされているが、明治維新を迎え、西洋式暦が日本にも導入された時、何故か曜日名だけは、この「七曜」が使われることになったのである。つまり、現代人が曜日の話をする時、おそらくその当人にはそうした知識はないであろうが、知らず知らずに古代の知恵と触れ合っていることになる。つまりはこの節最初にも述べたように、多分これが最も身近に生きている古典なのである。

まとめ

以上、今も身近に生きている古典の例として、「相撲」と「曜日」の二つを挙げたが、これで何とかその言葉が誇張でないことは分かっていただけたのではないかと思う。これも最初に述べたことだが、これに類することはまだ限りなくある。いわば、古典への扉は至る所にあるのであり、これこそが現代でも古典を学ばなければならない理由なのである。つまり古典を学ぶということは、同時に現代社会をより良く理解することでもある。

ただ、生徒をそこに導くために必要なのは、本稿でもうすうす理解いただけたように、我々教師側の、学問領域をも越えた該博な知識なのである。元来国語とはそのような科目だし、本誌読者ならその意志は多分にあると推測するが、我々ももっともっと勉強しようではないか。